

大和市人権指針改定検討委員会 第4回会議議事録

日 時：平成27年10月 9日（金） 午前9時30分～午前11時30分

場 所：大和市役所 本庁舎 第6会議室

出席者：鏡会長、渡辺副会長、落合委員、古谷田委員、佐藤(正)委員、佐藤(倫)委員、土井委員、樋口委員

(事務局) 船越課長、折笠係長、今野主事

欠席者：遠藤委員

傍聴者：1名

議 題：1. 開会のあいさつ

2. 講義「ヘイトスピーチについて」

講師：辛淑玉（しんすご）さん

3. 質疑応答

4. 「大和市人権指針」について意見交換

5. その他

1. 開会のあいさつ

国際・男女共同参画課 船越英一課長よりあいさつ。

2. 講義「ヘイトスピーチ※について」

講師に辛淑玉（しんすご）さんを招いての講義。

※「ヘイトスピーチ」とは、特定の民族や国籍の人々を排斥する差別的言動であり、人々に不安感や嫌悪感を与えるだけでなく、人としての尊厳を傷つけたり、差別意識を生じさせたりしかねず、マスメディアやインターネット等で大きく報道されるなど、近年社会的関心を集めている。

- 東京で行われたヘイトスピーチの動画を視聴。
- ヘイトスピーチの中では、在日韓国朝鮮人に対する差別的表現が多々使われている。
- ヘイトスピーチの件数は、沖縄で多い。北海道も増えてきている。
- 「のりこえねっと※」が確認している2014年度のヘイトスピーチの件数は467件であったが、2015年度は上半期だけですでに136件に上っている。秋葉原などで毎日行われているヘイトスピーチ等は含んでいない。

※「のりこえねっと」とは、「ヘイトスピーチとレイシズム※を乗り越える国際ネットワーク」を略した名前。尊厳を冒すヘイトスピーチとレイシズムを許さない活動をすすめるために2013年9月に結成された。

※「レイシズム」とは、人種・民族差別を意味する。

- ヘイトスピーチは動画によってネット上で世界に配信されている。ヘイトスピーチを行う団体は、動画を実績として撮影、配信し、賛同者を集めてきた。
- 最近は反ヘイトの動きも多くなってきた。
- しかし、在日韓国朝鮮人に対して関心がなくても、ただ娯乐的にヘイトスピーチに参加する人も増えている。公園から公園を練り歩き、多くの参加者と一体となることに娯楽を感じる人がおり、差別の娯楽化がすすんだ。
- 在日韓国朝鮮人は怯えており、中傷をされても、やり過ごすことを習得してしまっている。
- 「憎悪のピラミッド」と呼ばれる、「偏見」→「偏見による行為」→「差別」→「暴力行為」→「ジェノサイド※」の図で言えば、今日本で行われているヘイトスピーチは、「暴力行為」のレベルまで来ている。

※「ジェノサイド」とは、他民族などへの迫害、抹殺行為等を意味する。

- 「ジェノサイド」のレベルでは、ナチス・ドイツによるユダヤ人迫害のような、合法的な命の選別が行われる。
- インターネットで流れるデマに対して、反対する流れも出てきた。
- 東日本大震災以降に、高校生・大学生だった世代は、生きることや働くことなどに関して、とても深く物事を考える。デマに対して反撃をする。
- 問題が何であれ、「反対をするやつは朝鮮人だ」などといった、差別的表現が蔓延している。
- 在日韓国朝鮮人の生存権の危機である。
- 在日2世や3世は、日本名で生きてきて、家庭では語られないために朝鮮の歴史等は一切知らない。日本名で生きている理由について「何かあったんだろうな」とは思っているが、何があったか分からないまま、「日本名でない生きていけないんだな」という「不安」だけが継承されていく。文化や民族的な継承は全くない。国籍と名前と差別によって自分の存在が作られていく。
- その「不安の継承」が影響し、在日韓国朝鮮人3世の自殺率は、日本人の1.5倍～2倍高い。
- 日本人に負けないように生きるには、2倍頑張り、女性なら4倍は頑張らないと生きていけない。一家の財産を投じて3世が頑張っても医者や弁護士になっても、過度の期待によって心が壊れてしまう。
- そして、「過剰適応」する。日本国籍を取り、極端に民族団体を支持する。ヘイトをやっている方にも、朝鮮人や被差別部落の方などの差別を受けている人がいる。これも「過剰適応」であり、「自分は違う。」「自分は日本人なんだ。」と言ってヘイトをする。
- 在日韓国朝鮮人であることを隠して生きていたり、日本人として生きてきたが、あるとき自分が在日韓国朝鮮人であることを知り、差別を受けて心を壊してしまったりする人がいる。
- カウンターと呼ばれる、反ヘイトの人々もいる。

- 自分たちの街で差別をさせない、という思いで、ヘイトスピーチが行われる道路に座り込みをする。
- 拡声器によるノイズで対抗するなど、反ヘイトの新しい戦い方も出てきた。
- ヘイトスピーチに対して、社会は確実に動き始めている。
- 全国で意見書や議会などでたくさん反ヘイトの意見が出ており、採択もされている。
- しかし、そういう動きが当事者（差別を受けている人々）の手元に届いていない。
- 例えばこの会議で人権について素晴らしいことが決められても、当事者の目に届かなければいけない。「あなたは一人じゃないんだよ」ということが当事者の目に届くことが、今は必要であると感じている。
- 当事者の目に届くように、できる限りひらがなでわかりやすくすることが必要である。多言語で作ることは大変である。
- また、漫画でわかりやすく伝えることも必要である。
- 差別を受けている人、マイノリティが孤立してしまうことは恐ろしいこと。当事者には情報は届いておらず、ただひたすら怖く、わからなくて沈黙している。在日韓国朝鮮人に限らず、マイノリティについて言えることである。

3. 質疑応答

(委員) 説得力のある、知らなかった話が聞けた。ありがとうございました。

(副会長) 迫力のあるお話ありがとうございました。「生存権の危機」という言葉が印象に残った。私自身はその生存権の危機を体験することはできないが、大和市には外国籍の方が多い。不法滞在や帰化をする外国人の保証人等に関わることがあるが、最近になってよく「そういったことに立ち入らないほうがいいよ」と言われることが増えた。悪意があるのではなく、私の心配をする友人がいる。なぜそう言われることが増えてきたのかが、今日の話聞いてなんとなく分かった気がした。また、「過剰適応」という言葉も印象に残り、周りにも外国人であることを隠して、「そんなに日本人のライフスタイルに合わせなくてもいいのに」と思うほどの痛ましい努力をする外国人の方がいる。在日朝鮮人が持つ「不安」についても今日の話聞いて、よく分かった。

(講師) 外国人には、同調圧力や日本の社会に対しての恐怖心がある。一つの例にごみ出しがある。ごみは毎日曜日によって分別して出さなくてはいけない。夜仕事をしている人たちにとっては朝のごみ出しは大変である。近くの集積所に出していたら、「ここはこの5軒の家の集積所だ」と怒られる。少し遠くの集積所に捨てられるようお願いをしたら「この網はみんなでお金を出して買ったので、お金を出していないあなたは使えない」と言われて断られる。ようやく近くの集積所で捨てることになったが、ごみ箱に入れて捨てるように言われる。ただ、昼間仕事で居ないため、ごみ箱を回収するのが夜中になり、一日中ごみ箱を回収できずに置かれたままにしてしまう。ある時からごみ箱に魚の頭などが入れられるようになる。つたない日本語で市役所に相談したら「地域で解決してください」と言われる。その外国人はパニックになった。ごみ出しにはそういったローカルルールがあり、日本人にとっては何の問題もなくとも、外国人は毎日

そういった困りごとがある。外国人の働く環境など、想像力を働かせてほしい。

(委員) 転入者全員に自治会に入ってもらえるようにしてほしいと市にお願いをしている。自治会長へ引き継ぐ等すれば連絡が取れ、手助けができる。

(講師) まず外国人は自治会がなにかわからず、また都心部では自治会がないと思う。少しのおせっかいが必要なのだと思う。また、同じ思いを持った人たちが、安心して語れる場所が必要である。被災地では、教会がそのひとつである。教会へ行かない人は情報を得ることが非常に難しい。しかし、母国とただで繋がるスカイプを使う外国人が圧倒的に多い。相談対応は、電話相談よりもスカイプが活用できるのではないか。

(委員) 東日本大震災のときに高校生・大学生だった若い世代が変化しているとの話があったが、マイノリティに対しての考え方が変わっているのか。

(講師) 東日本大震災のときに高校生・大学生だった若い世代は、殺されるという感覚をちゃんと持った世代であると思う。「私たちがこのままなにもしなかったら、生活がなりたない、戦争が起きるのではないか」、などリアリティを持って考えられるようになった。その世代はマイクを持たせれば、全員その子の言葉で違う話をする。インターネットが既にある社会で育ち、ものすごい勢いで情報を見ている。今の10代は本を読む、今の10代は現場に行く、そして政治的な偏見が全くない。おかしいと思ったことにおかしいと言える。

(委員) 一過性のものでないか。若い世代は育ってきているか。

(講師) 育ってきていると思う。いつかはわからないが、社会は変わると思う。人生の大惨劇を人生のど真ん中で受けることで、若者の考え方は変わっていく。災害が生き方を変える。若い世代は、今は力がなく政治的に負けることはあっても、文化は生まれてきている。

(委員) 歴史的なことなどについて、主流政治やマスコミなどによって群集的に動いてしまうことはないか。

(講師) それはあると思う。今現実には、韓国嫌い、朝鮮何するか分からない、中国怖いなどと思われる。若い世代が社会人になったときに、リアリティを持った対応が期待できると思う。正義がかっこいいという価値観に変わってきている。少ないお金で一緒に生きていく、助け合いながらの社会的なネットワーク作りが、自治体の課題だと思う。

(委員) 文科省や教育の現場では、今話されている内容とは異なることが言われている気がする。

(講師) 管理教育は完成していて、限界が来ている。ひとりひとりの意思を持った組織にしていきたいと動いている。叩かれる方もしんどい思いをしているが、叩く方、管理をする方も限界が来ている。

お願いがあるのだが、何かを作るときに「国民」や「市民」という言葉をなるべく避けてもらいたい。「ここに住む人々」や「共に生きる人々」、「大和市に住むみなさん」といった表現にしてほしい。「国民」や「有権者」と言われると、その言葉だけで排除される感覚を持つ人がいる。何か書くときは、「ここに住むみなさん」といったように表現する

ことから変えていただくと、印象は変わってくる。いい社会を一緒に作っていけると思っている。

(委員) アイヌの人々はどうか。

(講師) 山谷で越冬闘争が起こっていたとき、冬になると温かい集合住居から外へ、いつも出て行ってしまう人がいた。結局凍死してしまったが、その人はアイヌの人であった。アイヌの人々は、倭人とのコミュニケーションがとても難しい。見えないところで死んでいく。見た目が、アイヌの人と分かりやすい人の苦悩、恐怖は大きい。そういう人々が、こういう会議の委員となって参加できるような時代になるとよい。

(会長) 本日は誠にありがとうございました。(ここで講師退室)

(委員) 講師の話聞いて、胸がいっぱいになった。

(事務局) それでは、引き続き人権指針のさまざまな人権課題について意見をいただきたいが、時間に限りがあるので、メールやFAXにて、後日意見をいただきたい。なにかここで話しておきたい意見はあるか。

(委員) 大和市で生活していると当たり前かもしれないが、市外から来ると、あの飛行機の音はとても驚くものである。あれは保健・医療に関する人権課題等、大和市の人権に関わってこないか。基地反対などではなく、大和市民の精神的安定の為に、なにかできないか。今の見逃されている状況を、大和市の人権で触れることは大切ではないか。

(委員) 前に比べると静かになったように感じてしまっている。

(事務局) 自治基本条例では、「第 29 条 市長及び市議会は、市民の安全及び安心並びに快適な生活を守るため、厚木基地の移転が実現するよう努めるものとする。」「2 市長及び市議会は、国や他の自治体と連携して、厚木基地に起因して生ずる航空機騒音等の問題解決に努めなければならない。」と定め、市民と約束をしている。

(委員) 厚木基地の騒音についての苦情窓口も分かりにくい。

(委員) 苦情の件数も把握してもらうために、苦情は伝えたほうが良い。

(会長) それでは、後日さまざまな人権課題について意見を提出していただき、本日は議論を終わります。

4. その他

次回会議日程については、11月18日(水)午後2時00分～午後4時00分で、「生活困窮者等について」の講義を含んだ会議とすることとなった。

以上